

中部の

エネルギーを 築いた

人々

豊橋の電翁・武田賢治

武田賢治は1865(慶応1)年、愛知県知多郡成岩(現在：半田市成岩)で、17代続く医師・荒川杏造の二男として生まれた。7歳のとき父に死なれ、苦難の末、東京に出て、1887(明治20)年、医術開業試験に合格した。その後、地元に戻り開業した。

そのころ、武田信玄の末裔で、愛知県議会の初代議長を務めた愛知県宝飯郡国府の医師・武田準平の婿養子となった。賢治は、地元の宝飯郡医師会長に就き、また、日清戦争に軍医として



武田賢治
(出典：武田賢治翁の小伝)

転戦した。30歳の時、その志が政治の世界に向けられ県会議員に当選し、医師と政治家と二股の生活を送った。愛知県会では県政刷新会を作り幾多の業績を上げた。しかし、衆議院議員選挙に立候補、落選したのを機に、事業経営者として豊橋電灯(株)に入社し実業界の第一歩を踏み出した。

今回は、医師から愛知県議員を経て、豊橋電灯から実業界

に入り、自ら“電翁”と号し、エピソードの多い武田賢治を紹介する。

豊橋電気での武田・今西のコンビ

豊橋電灯(株)は1894(明治27)年、当時、豊橋商業会議所副会頭をしていた三浦碧水等によって設立された。そして、1894(明治27)年に梅田川発電所(出力：15kW)、1896(明治29)年に牟呂発電所(出力：30kW)を建設したが、収支は赤字続きであった。そこで、三浦社長は、政治家を辞めた武田賢治を取締役に招いた。

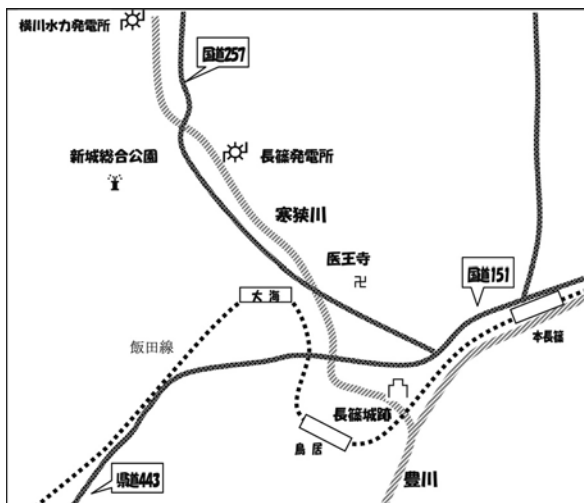
武田が豊橋電灯を引き受けるにあたり、当時、ヤマカン事業と言われた電気事業を「無尽の水を利用して無限の電力を起こし、産業の動力として国家を利し、他を利し、己を利す、この国家的事業に努力し精根を傾注する」とその決意を述べた。そして会社に寝泊まりし、自ら飯を炊き、自ら需要家に行き電球取替えなど社員の先頭に立って努力した。その2年後には、欠損続きの会社を配当できるまでに立ち直らせた。

1906(明治39)年、豊橋電灯から豊橋電気(株)

に改称し、新たに電力販売を定款に加え、豊川の上流巴川に、当時県内最大出力を誇る見代発電所(出力：350kW)の建設を計画し、1908(明治41)年に完工させ、豊橋市に送電した。同年、豊橋は市制を施行し、陸軍15師団を誘致するための電気、水道、演習場や営舎など、近代都市としての基盤を整備することが急務であった。

この頃、武田は日本の電力王・福沢桃介を知り、お互い肝胆相照す交際が始まり、福沢を豊橋電灯に招聘した。そして、1910(明治43)年、取締役社長・福沢桃介、専務取締役・武田賢治、技師長・今西卓のコンビが生まれ、当時、資本金百万円と大企業並みにし、長篠発電所の建設計画に取り掛かった。

長篠発電所(出力：750kW)は、今西が京都大学在学中に学んだナイヤガラ瀑布の落差を利用した発電所の仕組みで、日本で最初の豎



軸水車を採用した。これは、本誌「2009年1月号：本邦初の縦軸水車を導入した今西卓」に浅野伸一氏が執筆している。ここに武田・今西両人の二人三脚が始まるのである。

「エピソード①

武田の側近として常に親炙し、事業の枢機に参与していた今西卓は、周りの人に「武田さんは本当に自分のお父さんのような気がします」と言っていた。これは武田翁にたいするお追笑とも受け止められるが、誰よりも熟知していたものと思われる。

東三河地方の実業家

武田は、元来天衣無縫な人柄で、福沢桃介と共に日本各地での電気事業に手を伸ばし、野州電気(宇都宮)の社長、浜田電気(島根)の取締役に就任した。又、東三河を中心に次のような各種事業を設立し産業発展に大きく貢献した。

- ①電気事業：豊橋電気・水窪川水力電気・豊川電気・乙川電力・渥美電気・福江電気・西遠電気・豊橋電気信託株式会社の社長、東邦電力・中部電力(岡崎)株式会社の顧問、大同電力株式会社の相談役など
- ②交通事業：豊橋電気軌道・豊橋自動車・豊橋循環自動車・山田松阪自動車

株式会社の社長、渥美電鉄株式会社の取締役など

- ③その他：名古屋鉄筋ブロック株式会社の社長、豊橋ガス株式会社の監査役などに就任した。

「エピソード②

水窪水力電気が合併する時に、定年になるものを除いて誰一人失業者を出さず、職を与え、退職手当も己に薄く、従業員に厚く分配した。

また、豊橋自動車を退職する時に、会社からまことに少ないけれどもと言って慰労金300円が出た。しかし、己はとらず、支配人に1割、残りは従業員全員に反物を買って与え、ねぎらった。」

武田と今西コンビの電気事業

武田賢治社長と今西卓専務取締役とは、両人の二人三脚で東三河地方を中心に、電気事業を始め、1922(大正11)年、渥美電鉄株式会社(豊橋～田原間)、翌年豊橋市内を走る豊橋電気軌道株式会社など各種事業を創設した。

ア 豊橋電気信託から豊橋電気(渥美)の設立

1921(大正10)年、名古屋電灯(株)は豊橋電気を吸収合併した。この合併前に、電気料金値

下げ要求の市民大会や、豊橋市議会での反対など紆余曲折があった。

同年、名古屋電灯と袂を分かった武田と今西は、豊橋電気信託(株)を資本金200万円で設立し、武田と今西がコンビで社長と専務取締役に就任した。そして渥美電気と福江電灯を譲り受けるという形で豊橋電気信託に併合し、翌年、豊橋電気(株)と改称し、渥美半島の電気

事業を統一した。

イ 水窪川水力電気株式会社の設立

1924(大正13)年、水窪水力電気が設立され、社長に武田、専務取締役は今西が就任した。同社は水窪川に西渡発電所(出力：2400kW)を1928(昭和3)年に建設した。そして発電電力の2250kWを卸売供給として岡崎電灯へ、水窪町に直配として電灯114灯、電動機12.8kWを供給した。同発電所は1943(昭和18)年に3800kWとなり、その後中部電力に引継がれ、1964(昭和39)年、4600kWに増設された。

1933(昭和8)年に今西専務が肺がんのため亡くなると、その衝撃は大きく、武田社長は、一世を風靡したワンマン社長として「今西は外堀で俺は本丸だ」と言っていたが、盟友を失った悲しみは大きく、1934(昭和9)年、豊橋電気以外の社長職を辞した。1937(昭和12)年、豊橋電気の社長を長男の正夫に譲った後、病没した。



中部電力・西渡発電所全景(出典：水力ドットコム)

武田賢治の略歴(1865～1937)

1865	慶応 1	愛知県知多郡成岩(現：半田市)で医家、荒川杏蔵の2男で生まれる
1887	明治20	医術開業試験に合格
		宝飯郡国府の医師武田洋平の婿養子となる
1894	明治27	豊橋電灯開業
1895	明治28	愛知県議会議員当選
1906	明治39	豊橋電気(株)と改称
1910	明治43	武田賢治、福沢桃介を豊橋電気(株)に招聘
		取締役社長：福沢桃介、専務取締役：武田賢治、技師長：今西卓
1912	明治45	長篠水力発電所運転開始
1921	大正10	名古屋電灯、豊橋電気を合併
		豊橋電気信託(株)設立、取締役社長に就任
1922	大正11	豊橋電気信託を豊橋電気(株)に改称
		渥美電気鉄道(株)設立、取締役社長に就任
1924	大正13	豊橋電気軌道(株)設立、取締役社長に就任
		豊川電気(株)設立、取締役社長に就任
1928	昭和 3	水窪川水力電気(株)西渡水力発電所完工
1933	昭和 8	豊橋電気(株)専務取締役・今西卓死去
1937	昭和12	死去